BUILT ON

小柳建設と街の人たちをつなぐ
CSRレポート
2017

その工事で、人と自然の未来をつくる。

会社概要

社名：小柳建設株式会社
URL：n-oyanagi.com
本社：〒955-0047　新潟県三条市東三条 1-21-5 TEL.0256-32-0006（代）
創業：1945年（昭和20年）11月
資本金：3億5千万円

事業内容

1. 建設工事の請負、企画、設計、監理およびコンサルティング業務
2. 不動産の販売、交換、賃貸、仲介およびその管理ならびにコンサルティング業務
3. 住宅の建設および販売ならびに土地の造成および販売
4. 地域開発、都市開発、環境整備等の事業ならびにこれらに関する請負、企画、設計、監理およびコンサルティング業務
5. 労働者派遣事業法に基づく労働者派遣業務
6. 公共施設の管理、運営業務
7. 遺跡・文化財の調査、測量、整理作業、報告書作成、保存活用、支援業務ならびにコンサルティング業務
8. 自然エネルギー等による発電事業及びその運営・管理ならびに電気の供給、販売等に関する業務
9. 前各号に付帯する一切の業務

許可関係

国土交通大臣許可　（特・般-24）　第13415号
一級建築士事務所　新潟県知事登録（ハ）第4396号
宅地建物取引業　新潟県知事（2）第4894号
測量業許可 登録第（2）-33094号
特定派遣業許可　特 15-300168
ISO9001:2008（品質マネジメントシステム）ISOQAR7276
ISO14001:2004（環境マネジメントシステム）ISOQAR7276
ISO/IEC27001:2013（情報セキュリティマネジメントシステム）SGS JP12 ／ 080230

事業所

加茂本店：〒959-1326　新潟県加茂市青海町 1-5-7　TEL.0256-52-0008（代）
東京支店：〒102-0072　東京都千代田区飯田橋 2-9-3　TEL.03-3230-8578
新潟支店：〒950-1344　新潟市西蒲区福島下新田 1261-1　TEL.025-375-1238
長岡支店：〒954-0124　新潟県長岡市中之島 4156-8　TEL.0258-66-0007
東蒲原営業所／燕営業所／見附営業所／柏崎営業所／田上営業所／村上営業所／新発田営業所／魚沼営業所／上越営業所
岩手営業所／宮城営業所／山形営業所／福島営業所／茨城営業所／千葉営業所／横浜営業所／滋賀営業所／岡山営業所
新潟事務所【レンタル事業部】／千刈事務所【舗道事業部】／埋蔵文化財調査室（事務所）／東京工事事務所

関連会社

株式会社エステートコンサルタント／株式会社阿部電機

経営理念

事業を通じて人類社会の進化発展に貢献すると同時に、全従業員とその家族の物心両面の幸福を追求し、誇りをもって会社を後世に伝えるものとする

CSR

「BUILT ON」小柳建設と街の人たちをつなぐ　CSR レポート 2017

CSR レポートのデザインをリニューアルしました。表紙のタイトルロゴは、「人間こそ全てである」の思想から生まれた「Humanist」という書体を用いて、よりしっかりとした骨格と質の高さを強調しています。また、「基盤を作る」ことの表現としての『BUILT ON』を２段組にし、言葉の意味をより明確に強調しました。

BUILT ON 発行・編集（2017年4月1日発行）
小柳建設株式会社 Oyanagi Construction Inc.

一級河川五十嵐川 災害復旧助成事業遊水地掘削（その5）工事

発注者／新潟県三条地域振興局
工事期間／2016年8月15日～2017年秋頃

1 どれだけの手間がかかろうと、地域を守る工事に工夫は尽きない。

2004年と2011年の二度。新潟県を襲った大雨による大規模な水害は、大きな爪痕を残した。このような被害を二度と繰り返してはいけない。これまでも水害後の復旧工事などに携わってきたことに引き続いて、新たな水害に備えるべく、小柳建設は遊水地をつくる工事に着手した。

雨量が想像以上に増えると、河川の堤防だけでは水の流入は防ぎきれない。水の流れを誘導する越流提を設置し、人家のない遊水地に水を誘導。のちに排水用の水門から水が出ていく設計にする。流入した水が、ひとつの遊水地に収まりきらないことも想定されるため、ひとつ目の遊水地からあふれ出した水や土砂の受け皿となる二次的な遊水地も設置した。水害以前の堤防を撤去する工事で、紙に書いてしまえば簡単に見える工程だが、撤去する土の量は、実に大型ダンプトラック2万台分。人々の暮らしの安全を確実にするためには、その分、工事も大規模なものになる。

しかしながら、「どれだけ工事に手間がかかろうと、確実にやるべき事業なのだ」と、土木事業部・所長の髙田幸博は語る。「未だに、雨の音が聞こえるだけで不安でたまらないという地域住民の方がいらっしゃいます。私たちがつくりたいのは、そういうみなさんが安心して過ごせるような元通りの生活なのです」。安全に絶対はなく、対策すべきことは尽きない。小柳建設は地域の人々を守るために少しの妥協もすることはない。

第一遊水地と第二遊水地の間の旧堤防。

普段は田んぼとして使われている第二遊水地。

髙田 幸博
土木事業部 所長

工事において必ず気をつけていることのひとつに「安全」があります。今回のようにトラックが何度も土を運び往復する際は特に。近隣住民の方への影響も考慮し、何度でも現場で注意喚起を行います。

BUILT ON 2017

「“BUILT ON”
「～を支える」「～の基盤になる」という英熟語。
建設業は人の生活を支える基盤であり、
人のために働く使命感を持って仕事に携わっていく
という決意を表題に表しました。」

道をつくる。堤防をつくる。
マンションをつくる。

街の土台や景色をつくるのが
建設業の役割だとしたら、
たくさんの自然をよみがえらせることも、
私たち建設業の使命だと思う。

人のために、自然のために何ができるか。
とことん考え、真っ直ぐに、貫いていきたい。

浚渫（しゅんせつ） レンタル事業部立ち上げプロジェクト

② 仲間を募り、世界中の水をより美しく。

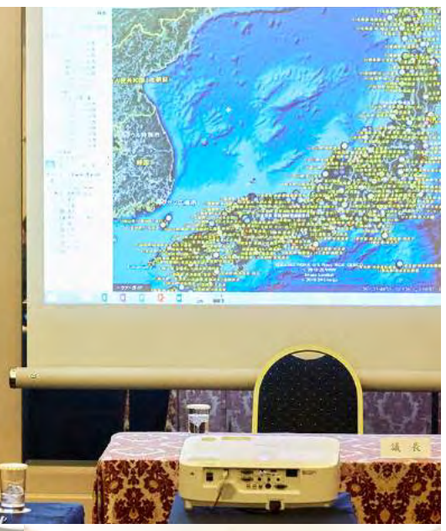
浅瀬で大型の浚渫機械が使えない場合に活躍する水陸両用の泥上掘削機。

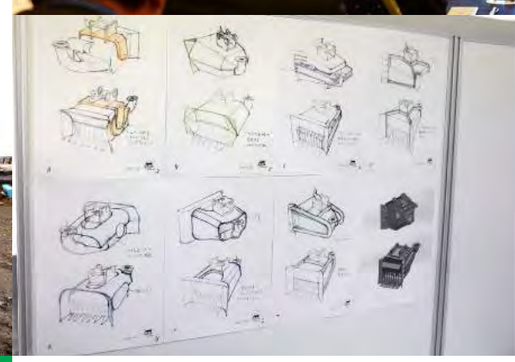
浚渫機械の本体部分は一般的なショベルカーに近い。

浚渫機械が乗る台船。

浚渫現場の特徴によって、吸込口は多様となっている。

吸い込んだ土砂を運ぶパイプも、金属やゴムなど様々な種類がある。





自分たちで汚した川は、自分たちの手できれいにしていくべきだ。ただ何かをつくったり生み出したりするだけではなく、取り除いていくこと。つまり川や湖の汚れや土砂、ヘドロを除去していこうとする浚渫は、小柳建設が担う社会に対する重要な使命でもあるのだ。

近年の社会において、環境への意識・配慮は重要視されるようになり、我々の浚渫事業に対して急速に依頼が増加してきた。環境に優しい企業や事業を目指したい。発注者のそういった声が増えることは、小柳建設の事業が世間に受け入れられているという証であり、一方で、依頼件数に対して、次第に自社だけで対応するのが難しいという現実に直面した。

独自の機械と工法に期待をして、他でもない小柳建設に依頼を頂けるお客様。しかし、全ての依頼に応えるには限界がある。そこで立ち上げたのが、新たに浚渫機械やそれを扱うノウハウをそのまま他社に提供する新規事業。全国に同じ志を持つ企業とパートナーシップを結び、その企業とともに、お客様の満足を追求している。

「もちろん浚渫機械は用途によって、小さなカスタマイズがたくさんできます。たとえば湖底の表層15cmの土砂を取り除きたいときと、川底の土砂をごっそり取り除きたいときに使用する機械は全く違う。工事ごとに、ふさわしい機械へと改良を行っていきます。『ないなら現場でつくってしまえ』と機械に自らアレンジを加えるスピリットをもつ小柳だからこそ、可能なことかもしれませんね」と話すのは、レンタル事業部・技士の南澤宏安。パートナーシップ企業に対して浚渫機械に関する工法、ノウハウの指導を行うのはレンタル事業部・主任の鶴巻裕基だ。「他社へノウハウを提供するのはこれまでなかったことですが、環境のために行っている技術なのだから独占しても仕方がない。私たちはこの事業で利益を上げることが第一目的ではなく、考え方に賛同して、環境をよくする活動を広めてもらいたいと考えています」。

2016年、パートナーシップ会が立ち上がり、レンタル事業も本格始動した。日本中のパートナー企業と協力を重ねながら、世界中の川や湖をもっと美しく。よりよい環境を目指して。強みを伸ばしながら、新たな社会貢献へ挑戦している。

鶴巻 裕基
レンタル事業部 主任

現場で培ってきた浚渫の技術、知識を「世界中の水をより美しく」という想いを込めて、全国に広めることが私の仕事です。

南澤 宏安
レンタル事業部 技士

現場でカスタマイズされてきた機械をもとにデータを残し、機械を進化させるのが私の仕事です。現場環境に応じて、都度カスタマイズが求められますので学びの多い毎日です。

国道289号2号 橋梁下部（その4）工事

発注者／北陸地方整備局長岡国道事務所
工事期間／2016年4月1日～2016年12月20日

③ 30年以上待ってくれている地域の人のために。工事の効率アップをはかれ。

小川 誠一（右）
土木事業部 所長

現場に足を運び、実際に手を動かす作業員さんに指示を出す現場監督をしています。豪雪地帯で絶壁という過酷な現場、動物や植物への配慮も意識しています。

八木澤 太郎（左）
土木事業部 所長

豪雪地帯で年間に工事ができる日数は決まっていますから、一日の効率をどれだけ上げられるかが課題です。日々の積み重ねを大切にしたいですね。

福島県南会津郡にある只見町。周囲には高い山々が連なり、隣接しているはずの新潟県三条市へさえ、直線ルートで移動することが不可能な場所だ。過去の文献によれば、そのルートは非常に急峻かつ長大な山道で、実際の距離は約32km、つまり八里ほどなのに体感ではその10倍に感じられるといわれており、ここを通ることは昔から「八十里越」と呼ばれている。

こういった過酷な環境に住む人は昔からいるにも関わらず、これまでこの交通の不便さは解決されてこなかった。病院などの急を要する施設に行くことは難しい。すぐ近くのはずの三条市へ行けない只見町民は車でわざわざ2時間をかけ、会津方面へ向かうしかない生活を強いられていたのだった。そこで、この課題に向けて劇的な改善を図るプロジェクトが発足し30年。小柳建設もその一端を担うこととなった。峠に巨大な橋を架け、人々が日常的に使用できる交通インフラをつくろうとしたのだ。

そこで始まった橋の建設だが、工事にあたって建設会社のチームはみな、すぐに大きな障害にぶつかることになる。それが雪だ。新潟県と福島県の県境あたりは豪雪地帯。毎年12月からゴールデンウィーク明け頃までは多量の雪に閉ざされ、工事を進めることがほとんど不可能な環境だったのだ。1年のうち半分が工事不可能となると、工事スピードも半分。想定よりも大幅に遅い進捗を強いられることになってしまった。さらに向かい風となったのは、建設関連の頻繁な法改正だと土木事業部・所長の八木澤太郎は言う。「長い年月がかかってしまう分、経年劣化、建築基準改正があることで、補強や補修が他の工事に比べて多かった」。少し進んだと思ったら、補強や補修による工事の内容の大幅な変更。2号橋梁プロジェクトは思ったようには進まず、すでに開始からは10年以上が経過している。

交通インフラの改善を心待ちにしてくれている地域住民のために、これ以上の遅れは許されない。工事計画の見直しが行われ「10時間施工」という通常よりも1日当たりの工事時間を長めにとる方法を実施したり、設計段階から計画を緻密に行い、より効率的な手段を模索したり、複数の組織で同時に工事を行ったり。限られた時間のなかでいかに進めるか、ということが考えられている。

「現在、橋台と橋脚の部分に関してはようやく完成が見えるほどに進んできました。やっともうすぐ橋を架ける段階に進めるかと思うと、一層住民の期待も高まるでしょうね」と言うのは土木事業部・所長の小川誠一。地域住民の待ち望んだ便利な橋であると同時に、橋をつくる現場にいる人間も待ち望んでいる、大きな誇りを感じる建造物になっていくことが期待されている。

断崖絶壁に、30mの高さの足場をつくる。橋を繋げるための準備も一苦労。

JAにいがた南蒲 北低温倉庫建設工事

4 新潟のうまいコメを支える6686㎡の巨大冷蔵庫。

発注者／全国農業協同組合連合会 新潟県本部
工事期間／2015年11月4日～2016年12月9日

全国屈指の米どころ新潟。この地の米の美味しさを支えているのは、その品種や製法。そしてさらに、これからは収穫後の保存方法も大きく味の向上にかかわることになるだろう。

JAの管理する倉庫を建設するものとして始動した今回のプロジェクト。つくるのは、米を大量に貯蔵することのできる、超巨大倉庫だ。建築事業部・所長の渡邉重樹に話を聞いたところ、このプロジェクトのポイントとなったことは大きくふたつあるという。ひとつはもちろん、この倉庫が食料の貯蔵庫としては非常に大規模なものであることだ。新潟県の県央地区から大量の米を集め、建築面積6686㎡の冷蔵庫に蓄えられる。どれだけ大量でも確実に納め、その重さに耐えうる頑丈な床が求められた。もうひとつ重要となったのが、倉庫内での保存環境だ。米をおいしく保つためには、室内気温10～15度、湿度60～80%が常に保たれている必要がある。これらのために庫内には様々な機器が設置され、庫内の環境変化を感知するセンサーなどが置かれることになり、それはさながら冷蔵庫のようだ。今でも十分においしいといわれる新潟の米がさらに全国で愛されることを目指して。小柳建設の大きな挑戦は続く。

渡邉 重樹
建築事業部 所長

今回の倉庫のように、内装がほとんどない建物でも機器やシステムの多い現場は確認事項が多く、現場を管理することがとても大変になります。円滑に進められるのは、現場で細やかな対応をしてくださるパートナーの川﨑さんのおかげです。

協力会社
株式会社 涌井建設工業 建築部 川﨑 祐介

巨大な施設建設を可能にするのは、現場での細やかなコミュニケーション。

工事が大規模であったため、共同で建設作業を行うパートナーとして実際の現場をともに管理してきたのが、涌井建設工業の川﨑氏だ。

「小柳建設さんとは、これまで何度もご一緒したことがあり、現場責任者の渡邉さんも経験が豊かで安心して仕事のできる関係です」。

本工事の、職人とのやりとりや現場での管理業務における懸念されたポイントを教えてくれた。

「今回の倉庫建設は通常の建設と異なり、温度や湿度の管理が厳しい、いわば巨大な冷蔵庫をつくるようなプロジェクトであることがとてもポイントとなりました。ちょっとしたスペースにも断熱材を敷き詰めたり、環境を把握するセンサーを取り付けたり。細かな作業が多かった分、現場での職人からの質問も増えていきましたね」。

そんな職人に伝わりづらい細かな作業の多い工事のとき、川﨑氏は設計図よりもさらに詳細な建物の1／5スケールの「納まり図」をつくり、説明を行う。どんなに小さな質問でも、わざわざそれをつくることを惜しまず、一つひとつの工程でコミュニケーションをとっていくことが、彼の考える現場を動かすプロとしての力なのだ。

協栄信用組合 加茂支店新築工事

5 屋根に敷き詰められた一面の瓦。和の美しさで、地域に溶け込む。

発注者／協栄信用組合
工事期間／2016年7月20日～2016年12月5日

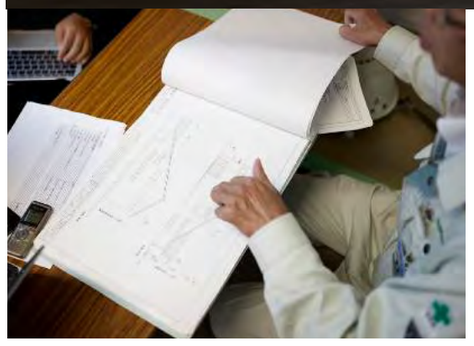
一見、ふつうの民家と見間違えてしまいそうなこの建物は、燕市に本店を置く協栄信用組合が、10年ぶりに支店を新築することになった加茂支店だ。もともと田上町と西加茂にあった2つの店舗をこの1店舗に統合したのには、より立地のいい場所でお客様に立ち寄ってもらおうという目的がある。建築に関するご要望はただひとつ、加茂らしいものをつくること。「北越の小京都」と呼ばれるこの地域ならではのアイディアと佇まいを追求して、今回の工事はスタートした。

「"加茂らしさ"を表現するため、『和』をコンセプトにしました。建物の正面は、2階から1階にかけて屋根を大きく設計し、一面を瓦で敷き詰めています。外壁も城壁調にして、金融機関とは思えない外観に。既存店とは異なる地域とのつながり方で、協栄信用組合さんにとっても新たなチャレンジになったと思います」と、設計と施工を担当する建築事業部・設計室・室長の松原巖は語る。

見た目を重視したように思える瓦屋根も、実は理にかなった機能的なデザインだ。冬場、この地域には西からの強い季節風が吹く。それによって起こる風化を、外壁面を減らすことによって軽減させるのだ。また、防犯という面から見ても、「大きな窓をつくらない」という点で安全性に役立っている。

1階の待合ロビーに関しては、天井を吹き抜けにすることで、開放感のある居心地のよい空間を創出。入りやすく、長く居てもリラックスした状態で打ち合わせが続けられる店舗設計にした。また、周辺地域にとって、中心金融機関となる加茂支店。騒音などで近隣住民に迷惑がかからないよう、社員駐車場を店舗の裏側に配置し、建物自体をまわりの家から離して建てるなどの工夫も凝らす。

現在工事は外壁部分が一段落し、内装工事に取りかかった。「この現場において最も難しい工程に入ります。というのも、警備やシステム関係といった様々な内装工事が分離発注されているため、それら全ての段取りを把握して指示していく必要があるからです。何を設置するかで、どういう施設になっていくかが決まります」と語るのは建築事業部・所長の成田彰吾。12月5日の営業開始日に向けて、徐々に街の景色に馴染んでいく加茂支店。地域に寄りそう理想のかたちを、お客様と一緒に最後まで追い求める。



1階から2階にかけて敷き詰められた瓦屋根。

松原 巖（右）
建築事業部 設計室 室長

協栄信用組合様にとってチャレンジと言える今回の建築工事。施工だけでなく設計から携わらせていただいたこともあり責任は重大です。思い切ったデザインではありますが、いつも通り丁寧に工事を進めていきたいです。

成田 彰吾（左）
建築事業部 所長

1階の待合ロビーに暖炉を設置する予定になっています。新潟だからこその心温まる設計。設置することでお客様が快適にご利用することができます。

6 過去の生活を知り、広めることに今の生活を救ってくれるヒントがある。

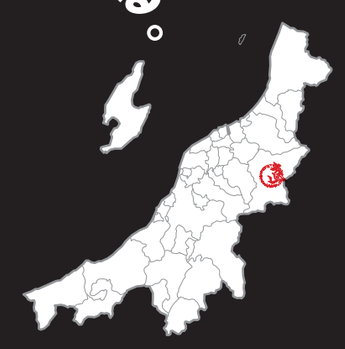
五十島（いがしま）遺跡発掘調査業務委託

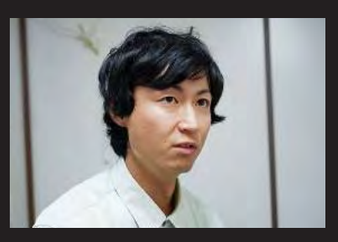
発注者／阿賀町教育委員会　委託期間／2016年6月9日～2017年2月28日
工事概要／発掘調査面積　175㎡

「たとえば過去、この場所にはどれくらいの頻度でどんな規模の水害が起こったかがわかれば、その情報から現在住んでいる地域にはどんな対策をするのが有用なのかがわかるかもしれない。時代をさかのぼって人々の生活を知ることは、今の私たちの暮らしをより豊かにしてくれることがあるはずなんです」。そう語ってくれたのは、土木事業部・埋蔵文化財チーム・技士である福永徹だ。

ここは新潟県にある五十島遺跡。2016年に小柳建設が発掘作業を開始した。現在は急傾斜の崖であり、ここを縄文人がゴミ捨て場として利用していたと考えられている。この場所からは土器や石器などが多く出土し、崖の上では石組みの炉跡が発見されているという。今に生かす情報を求めるからこそ、必要となるのは正確性。発掘作業は出土物を傷つけないよう、シャベルや竹串など細かなものを使った手作業で進められている。

「発掘作業を行って情報を得ることも大切ですが、もっと大切なことがあります」と語るのは、土木事業部・埋蔵文化財チーム・技士である坂之井真弓だ。本当に必要なのは、得られた情報を地域の人間にきちんと還元していくこと。それにより今の生活を改善し、非常時に備えることもできるかもしれない。そうやって過去の生活から得られるものを適切に今生きる人へつないでいくことも、たしかな社会貢献なのだと小柳建設は信じている。





福永 徹
土木事業部　埋蔵文化財チーム 技士

調査後は地すべりを防ぐための工事が行われます。工事で崖を補強する前に、遺跡が埋まっていないかを発掘調査しています。この土地の文化を残すことが私たちの使命です。

坂之井 真弓
土木事業部　埋蔵文化財チーム 技士

出土した土器や石器は、どういう状態で埋まっていたか細かく図面に記録します。新しい遺跡に出会い、発掘することも楽しいですが、昔の人々の暮らしの記録を後世に残すことが第一です。

7 新しい文明をつくる者には、古きを形に残していく責任がある。

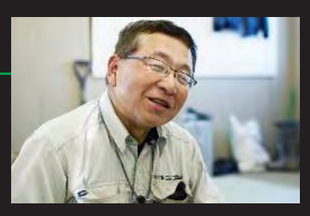
糞置（くそおき）遺跡　埋蔵文化財発掘調査業務委託

発注者／福井県教育庁生涯学習・文化財課（元請　株式会社キミコン・一部協力）
工事期間／2016年10月3日～2017年3月31日　工事概要／発掘調査面積　8140㎡

2022年。開業が予定されている金沢―敦賀間の北陸新幹線は、私たちにさらなる移動の利便性と各都市の発展をもたらしてくれるだろう。しかし一方でそういった文明の下、人類がこれまで積み重ねてきた貴重な文化が封じ込められてしまう可能性もある。糞置遺跡発掘調査は、新幹線の計画路線上を発掘し、記録保存を目的として文化財の調査を行っている。糞置遺跡は福井県に存在する遺跡で、その名の通り生活の中で出てくる糞尿を、栽培に必要な肥料として大切に保存していた場所が近かったと考えられている。周囲には弥生時代から古代にかけての集落やお墓等が埋もれている可能性が高く、過去の生活を知るものが発見されることが期待されるのだ。

「新しいものをつくるのもいいけれど、それを行うからにはこれまでの歴史を記録し、保存していくことが、我々の責任。人類の歴史の証を、きちんと形ある資料として残していきたいと考えているんです」と語るのは発掘調査支援調査員・小泉信吾。本プロジェクトの担当者だ。

ちょうど取材・撮影が行われた日は、弥生時代の木製の椅子が出土したということで、現場は大いににぎわっていた。これらは先人が文化をつくり、生活をしてきたことの証。それらをきちんと形に残し、後世に伝えていくことをしてはじめて、この場所へさらに新たな歴史を重ねていけるのではないだろうか。



小泉 信吾
発掘調査支援調査員

何十年と、こういった現場に携わっていますが、今回のように弥生時代の椅子が出土するようなことはめったにないこと。歴史的な瞬間に立ち会えたようで、誇らしい気持ちです。

細心の注意を払って重機で土を掘った後、小さな出土物に対応できる細かな道具を駆使して慎重に作業員が手作業で発掘を進める。

8 地域への貢献を続けながら、世界で勝負するためのIT化へ。

海外視察プロジェクト　社内での取り組み

建設業とは、非常に古い体質の世界にある。職人気質の人間が多く、仕事は属人的。資料はほとんどが紙のもので、独特の下請け文化も存在する。そんな閉じた世界に、私たちはいつまでもいていいのだろうか。そういった旧来のあり方から変わりたい。私たちから業界全体を変えていきたい。2014年6月に社長に就任した小柳卓蔵は、小柳建設として新しい建設会社の道を模索していた。変化をするために、まずは知ることから始めよう。自分たち以外の業界、国外の様々なものを調べ、社員とともに海外視察へ赴き、新たな技術や文化に触れていくことを実践しようと彼は考えたのだった。

海外視察へ行けるメンバーは社内公募。役員から新卒まで、みな平等に選考を受けた。訪れたのはカナダ、アメリカ、そしてヨーロッパ、複数の国や地域を訪れる視察プロジェクトだ。各国の建設機械を扱う企業の社員や最先端のIT企業の代表と面会した。普段仕事をするときは見たことのなかった、しかし旅行とも全く違う体験。視察を経験したメンバーはそれぞれの立場、視点から、多くの発見や学びの声を聴かせてくれた。

まずは小柳建設も注力している浚渫に関する海外の技術。日本の浚渫機械とは全く異なる大規模なつくりをした機械は、海外の技術に触れる驚きとともに、海外から実際に新たな機械を導入するきっかけにもなった。次に、ITの分野。建設業界は遅れているといわれるIT化、IoT化。最先端技術を取り入れることで、建設機械の自動化や現場の無人化が可能となり、これまでよりも効率よく、かつ、安全に工事を行っていくことの可能性が感じられるものだったという。さらに視察メンバーから強く聞かれたのは、海外と日本の「働き方」の違いを肌で感じたということだ。海外では日本とは違って、企業への帰属意識や愛社精神そのものが仕事のモチベーションとなっていることが少ない。会社側が働く人にとって魅力的であるよう努力しなければと学び、社内でも働く環境を見直していく大きな足掛かりとなったようだ。そして最後に聞かれた感想はやはり、実際に行ってみたことで、自分も何か一歩踏み出してみる行動をしたいという気持ちの変化だった。それまでは「本当にできるのかな?」と思っていた最先端の技術が、「できる!」というワクワクに変わる。そんな気持ちを抱きながら仕事に向き合えるように変わっていったという声は、ひときわ目立つものだった。

この地域でのNo.1でも、日本No.1でも、ダメ。自分たちは世界に打って出る、これまでの建設業にとらわれない企業にならなければならないのだ。現状維持は退化であり、次に目指すは30年後の5000億企業グループ。大きな目標を掲げ、さらに小柳建設は進化を続けていく。

総務部 人事課
堂谷 紗希

海外視察を通して、働く環境を変えることの可能性、そしてその変化を楽しんでいくことの大切さを感じました。自ら一歩踏み出し、変えていくことで社内にいい影響をもたらしたいです。

常務執行役員 調達本部 副本部長
青野 秀幸

私自身は非常に長く小柳建設に勤めていますが、多くの刺激を受けることで、また違った角度から自社に関して気付かされ、深く考えることのできる機会になったと思います。

土木事業部 技士
青野 鉄平

建設業界はまだまだ変えていける余地が多くあると思います。今回海外の様々な文化や技術に触れ、その気持ちは一層強くなりました。自社だけでなく、業界全体の変革を意識しなければと感じます。

環境営業部 環境営業課 課長
小林 敬行

一見建設業界と関係ないような最先端の技術も、将来的には建設の世界で活かせるかもしれない。そんな視点で見る世界は、本当に新しいものばかりでワクワクしました。特に無人化や IT 化など、目指すべきものが明確になりました。

9 クラウド技術の導入で、仕事のあり方そのものから改革していけるはず。

IT基盤整備プロジェクト　社内での取り組み

総務部 IT システム課 課長
和田 博司

新しい仕組みや技術を導入することで、働き方は必ず変わるはずだと期待しています。「いつでも、どこでも」をキーワードに、働きやすく管理しやすい体制を目指し、改革を続けていきたいです。

総務部 IT システム課
佐藤 裕也

今後は社員全体へのリテラシー教育が鍵となってくると思います。導入して終わりではなく、使い方を覚えて終わりでもなく、意識しなくても自然と使いこなせるようになるまでが私たちの目標です。

水害が多いといわれる地域に本社を構える私たち。サーバーを自社で抱えていれば万が一のときのリスクは大きく、ただでさえ社内で管理するコストもかかりすぎていることが懸念されていた。そこで実施されたのが、クラウド環境に移行していく動きだ。

初めは水害へのリスクやコスト面から着手された社内プロジェクトだったが、これらは同時に、小柳建設の内部へ大きな業務改革をもたらそうとしている。たとえばSkypeやチャットワーク、Office 365。オフラインで属人的に行われていた業務を広く共有できることで、業務が格段にスピードアップした。連絡の仕方ひとつ、出勤スタイルひとつ、社内のすべてのことがクラウド化によって変化しようとしている。期待できるのは、仕事のあり方そのものを多様化していけることだ。導入フェーズが完了し、今後は、社員へのスキル普及と、リテラシー教育というフェーズに移っていく。ITシステム課・和田博司と佐藤裕也を中心に、クラウド化を通じた社内改革は、まだ始まったばかりである。